

《安田 登》氏

「残念」の声を聴く～能と日本人の死生観～

能とは

能は観阿弥、世阿弥によって室町時代に大成された芸能です。多くの人に愛されていた能ですが、江戸時代になると武士が嗜む芸能（幕府の式楽）として武士のための芸能になりました。明治期の西洋化の流れの中で一度衰退するも、その後盛り返し、これまで 650 年ものあいだ途切れることなく受け継がれてきました。

最初に能の話のひとつ紹介しましょう。『定家』という能です。

百人一首の選者とされる藤原定家と式子内親王にまつわるお話です。旅の僧が雨宿りをしていたところ突然現れた女性に招かれ、ツタがからまった墓に案内されます。そこで女性は「玉の緒よ 絶えなば絶えね ながらえば 忍ぶることのよわりもぞする」と、生前互いに想いを寄せつつも想いを遂げられない恋の歌を詠みます。実は、この女性は式子内親王の幽霊で、定家の墓から伸びたツタが自分に絡まり、成仏ができないと、その思いを旅の僧に伝えに来たのです。その思いを告げたあと女性は墓のあたりに消えてしまいました。不思議に思った僧がお経を唱えると、そのお経の力でツタがほどけ、式子内親王の幽霊は感謝の舞を舞います。が、最後にはまた墓からツタが伸びて来て、彼女を墓の下に引き込むのです。

この『定家』のような能を夢玄能といいます。夢玄能の特徴は、主人公であるシテが「この世ならざる存在」であるということです。能『定家』のように幽霊であることもあるし、植物や動物の精霊、あるいは妖怪、そして神様であることもあります。特にシテが幽霊の場合は、その人がこの世に再び現れるのは、この世に残した念（おも）いがあるからです。そして、『定家』の僧のような役をワキといいます。夢幻能では、ワキと呼ばれる生者が、シテである幽霊と出会い、そしてその残念を昇華する、そのような物語になっています。

ワキがそのようなことができるのは、この世とあの世との「あはひ」に生きる者だからです。ワキという語は「分く」の連用形、すなわちふたつの世界の「あはひ＝境界」が原義です。ワキは、死者と生者とのあはひ、神と人とのあはひに生きる者なのです。

ワキがそのような存在になったのは、順風だった人生がある日、突然、上手くいかなかったからです。そういう時、人はワキになり、そして旅をします。そして幽霊であるシテに出会うのです。

このような芸能、演劇は、世界的にはとても珍しいですが、日本では近代でも、たとえば宮澤賢治の『銀河鉄道の夜』、夏目漱石の『夢十夜』など案外多くあります。

夢玄能の成立要素

では、このような夢玄能が日本でなぜ成り立つのでしょうか。3つの視点からお話したいと思います。

ひとつは、日本人は古来、死者と親しい民族だったからです。仏教の行事である「お盆」は、中国では死者を弔う儀式ですが、日本では死者を呼び戻し数日間一緒に過ごす風習に変わりました。日本の死者は、生者の近くにいる、戻って来たり、またあの世に行ったりできるのです。「死」という文字は白骨を拝む姿をあらわしたものです。その漢字が日本に入ってきました。漢字は日本に入ってくると、かつてあった日本語の読みが与えられ、それが訓になります。しかし、「死」という漢字には「訓」がありません。訓がないとい

うことは、その漢字が入って来たときに、日本には「死」という概念がなかったということです。そういう漢字を動詞にする時には「サ変動詞」を使います。「死」は「死す」となります。「死ぬ」とはならない。ということは「しぬ（死ぬ）」と「死」とは本来は別の言葉だったということです。

では、「しぬ」とは何だったか。もともとこの語は「しなしな」になるという意味でした。たとえば、しなしなになった植物に水をかければ生き生きするように、「しぬ」とは、また生き返って来る可能性のある一時的な死を言いました。だから、日本ではお盆になると「死者」が戻ってくるわけです。そんな行き来を何度も繰り返しながら、その亡くなった方は生きている人々の中で魂として生き続けるのです。これが夢玄能が成立する第一要素です。

第二の要素は、日本人には「見えないものを見る力」が備わっていて、それがとても強いということです。そろばんを習っていた人は、そろばんの盤を、頭の中に出現させて暗算したことを覚えているでしょう。障子の棧などがあると、それがそろばんの盤の代わりになって、よりやりやすくなりました。私はこれを「脳内 AR（拡張現実）」と呼んでいます。大名庭園は武士たちの脳内 AR の鍛錬の場でした。能もその脳内 AR の発動を期待して作られています。このような能力を日本人は持っているのです。

そして、夢玄能が成立する第三の要素。それは日本の土地の特殊性です。日本は時代をいうときに土地の名前を使います。そしてその名がつけられた土地は現代においてもその時代の趣を色濃く残します。これは時代だけではありません。土地の名前の由来となった神話や物語が多く残っており、その土地に立つとその神話や物語を思い出されます。日本の土地というものは、物語の記憶をそこに貯める「記憶の集積地」なのです。

歌枕というものもあります。歌の記憶の集積地です。元々「枕」とは神霊の宿る「真実（ま）の蔵（くら）」です。歌の記憶の集積地である歌枕は、多くの歌の記憶を圧縮してそこにあり、そして心ある旅人によってそれが解凍されるのを待っていて、歌人が歌を詠むと、集積された過去の歌の記憶が解凍されて現れ、新しい世界を生み出す、それが歌枕です。能の物語は歌枕で起きることが多いのです。そこに眠っているシテがいる。そこに、旅するワキに通りがかり歌を詠む。すると、シテが目覚めて、その残念を語るのです。

以上、死者と親しく、見えない幽霊を見る力があり、そして記憶の集積地としての歌枕が存在する、この3要素によって夢玄能が成立し、650年経った今も演じられ続けているのです。

能の時間感覚

ここで先ほどの『定家』の場面を思い出してください。まず僧が登場し、式子内親王の霊である女性が登場し、話を聞きました。ここには2つの時間が流れています。ワキである僧の過去から現在、未来に行く「順行する時間」と、シテである霊の、出会った瞬間から過去へ過去へと戻ろうとする「逆行する時間」。元々は別だった2つが一緒になっていく。そこに出現するのは「今」でもあり「昔」でもあるという新たな時間、すなわち「今は昔」です。これが幾度も繰り返され、シテの生きている時間は、今や昔を越えた「永遠」という時間になります。

では、時間とは何なのでしょう。私は過去に九死に一生を得たことがありましたが、その直前に今までの記憶が一瞬のうちに現れるパノラマ視現象を経験しました。時間とは決して流れるものではなく、今とい

う一瞬の中に過去から現在、そして未来までもがすべて詰まっている。これは能の時間であり、そしてこれこそが日本人にとっての時間感覚です。死者も生者も、これから生まれてくる子どもも全てが、今という一瞬の中に入っているという感覚です。

残念の昇華

「残念の声を聴く」が本日のテーマです。

「残念」とはもともと「念が残る」という意味です。「念」が残ったまま亡くなった幽霊は完結されなかった想いを抱いたまま土地に宿り、ワキが通りかかるのを待ちます。ワキはシテに想いを語ってもらい、語りで足りなければ舞ってもらう。それを心を込めて聞くことで、シテの残念は昇華されます。一度で足りなければ何度も何度も聞く。それが能です。

「お通夜」、これも実は能と同じ事をやっています。亡くなった方の最近のことを話し始めると、次第に昔の記憶へと遡り、子どもの頃の記憶を知っている方はそういう記憶も出てきます。これは先ほどの2つの時間が重なっているのです。能を見たり、お通夜をしたりすることによって亡くなった方の残念が昇華されます。しかし、それだけでなく自分の残念も昇華されているのです。

皆さん自身も過去において何かを捨て去って今の自分があると思います。捨て去ったものを普段は見ないふりをしています。しかし、それを放っておくと、急にすべてが嫌になってしまうことになりかねないと心理学でも言われています。それを防ぐには、時々それらを思い出してあげることが大事です。

その方法が、能であり、お通夜なのです。これら儀式化した空間で思い起こすことにより、人はそれから自由になる。「残念」を昇華することができるのです。

最後に、世阿弥の言葉「初心忘るべからず」についてお話ししましょう。「初心」の「初」という字は、左側が「衣」、右側が刀で、衣を作るときに布地に最初にハサミを入れることを意味します。どんなに美しい布地でも、着物を作るためには、そこにハサミを入れる必要がある。人もそうです。変化するためには過去を切り捨てる必要があります。それが「初心」です。

世阿弥はまず、「時々の初心忘るべからず」と言っています。人生には、小学校、中学校…、そして就職、結婚など様々なステージがあります。その時々、過去の自分を一度切り裂き、切り捨てていって変化せよという意味です。

また、世阿弥は「老後の初心忘るべからず」「命には終わりあり、能には果てあるべからず」とも言っています。確かに人の命には終わりがあるように見えますが、生きている限り、そこには果てがない。常に初心を繰り返していけ。

自分の過去を切り捨てることは怖いことです。しかし、そこは安心してもいい。なぜなら、本当に大切なものは、どんなに切り捨てても自分の中に残っています。

それが世阿弥の「初心忘るべからず」です。